

シルクロードの文字と文化

吉池孝一（愛知県立大学外国語学部 教授）

1. はじめに

「シルクロード」（絹の道）は、狭義には、タリム盆地周辺を經由して、ユーラシアの東と西を結びつける交易路を指すが、ここでは東と西の文化が行き交った道ととらえ時代もこだわらないことにする。

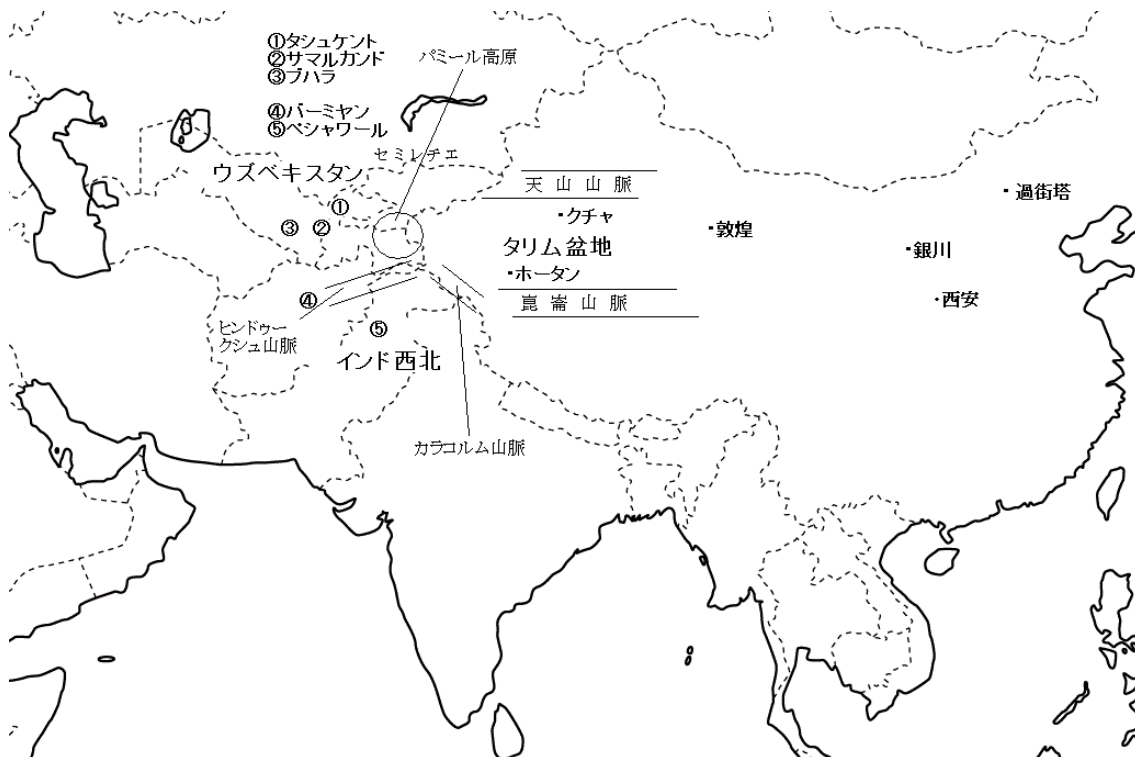


図1. シルクロード簡略図

この東西文化交流の道に沿って伝わった文字は多種多様であるが、次の3点にしばり、その範囲内の文字を扱う。

- ア) ギリシアとインドの出会い。
- イ) ソグドと中国の出会い。
- ウ) モンゴル帝国における諸民族の交流。

この三点にしばったが、文字を扱う際、資料の質を一定にすることにより見えてくるものがあるという立場から、貨幣の銘文を資料の中心にすえる。それでは、なぜ貨幣の文字を扱うのか。貨幣の文字は文字のサンプルとして次の点において優れている。

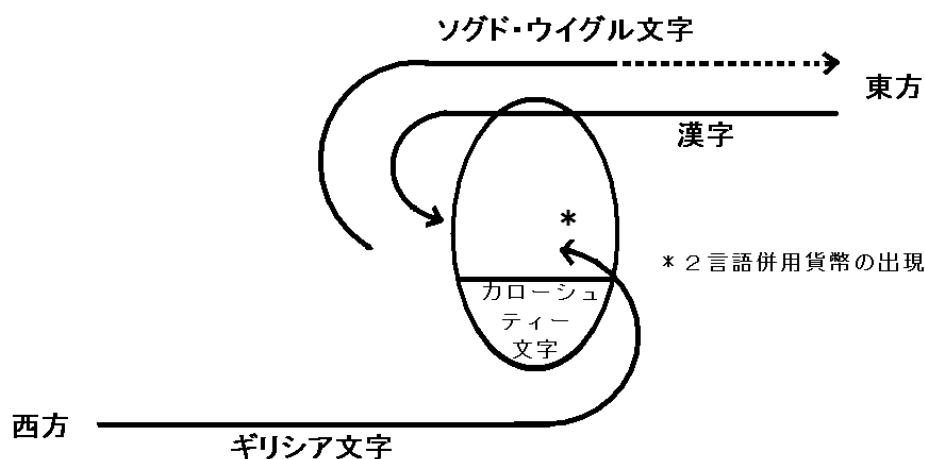
- ①銘文は短いながらも完結した意味をもっている。
- ②多量に発行されるため欠落や摩滅を他の貨幣で補うことができる。
- ③規範的な字形字体および表現形式となっている。

④比較的容易に年代と発行地域を特定することができる。

題に「文字と文化」とある。文字そのものが文化の結晶でもあるが、ここで言う文化については多少考えがある。文字を載せる媒体としての貨幣は、それを発行する集団が了承した一定の形式をもっている。その形式は習慣の型（文化）として強制力を持つが、他の習慣の型との接触により変容する場合があり、東と西の文化の接触による文化の変容の一部を、貨幣をとおして見ることができる。なお、今回使用する資料はすべて古代文字資料館所蔵による。

2. 貨幣の道（文字の道）の模式図

これより、ギリシアとインドの出会い、およびソグドと中国の出会いに関わる文字について検討するが、その前に東西文化の交流を模式化した図を見ておきたい。東西文化の交流の道は、“貨幣の道”でもあり、また“文字の道”でもある。その交流の概略を示すと次のようになる。中央の楕円は、パミール高原周辺のソグディアナやインド西北などの地域を指す。



西方のギリシア文字の貨幣とともにギリシア人が東漸し、カローシュティエー文字などを使用するインドの人々と出会い、新たな貨幣が生まれた。これが一つ目。次に、パミール高原の左に位置するソグディアナ(今のウズベキスタン)のソグド人が東方の漢字圏の人々と出会い、新たな貨幣が生まれた。これが二つ目。まず一つ目のギリシアとインドとの出会いから確認する。

3. ギリシアとインドの出会い

ウズベキスタンの東南部には、アレクサンダー大王の東征軍が興したグレコ・バクトリア（前3-前2世紀。現在のウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯）の故地がある。グレコ・バクトリアではギリシア文字で書かれたギリシア語の貨幣が発行された。その後、グレコ・バクトリアの勢力は、

ヒンドークシュ山脈を越えて、インド西北部に進出した。インド・グreek朝と呼ばれており、ギリシア文字によるギリシア語とカローシュティー文字によるガンダーラ語(インド系)の2言語を併用する貨幣を発行した。下は『ミリンダ王の問い』に登場するミリンダ(メナンドロス)の銀貨(前2世紀)。



左：ギリシア文字で“救済者たる王メナンドロスの【貨幣】”とある。

右：カローシュティー文字で“救済者たる大王メナンドロスの【貨幣】”とある。

インド・グreek朝の後、幾つかの民族の興亡があり、イラン系のクシャーン朝が興った。クシャーン朝では、カニシカ王(後2世紀)の頃から、ギリシア文字を使ってバクトリア語(イラン系)記した貨幣を発行するようになった。インド側の貨幣にも変化があった、これまで諸部族は抽象的な文様を打刻した貨幣を発行していたが、写実的な文様の貨幣も発行するようになった。これはギリシアの影響とされている。

- ①ギリシア文字ギリシア語とカローシュティー文字ガンダーラ語(インド系)による2言語併用貨幣を発行。
- ②ギリシア文字でバクトリア語(イラン系)を表記した貨幣を発行。
- ③写実的な文様をもつインド貨幣を発行。

4. ソグドと中国の出会い

パミール高原を超えて西に出ると、ウズベキスタン共和国に到る。ここには六朝から唐代にかけて東西交易に活躍したソグド人の故郷があり、ソグディアナと称される。ソグドが発行した初期の貨幣は写実的な人物像の周囲にソグド文字ソグド語の銘文がある打刻の貨幣である。その後、円形で中央に四角い穴がある中国式の銅貨が鑄造された。



ブハラの銅貨



セミレチエの銅貨

ブハラ(位置は図1参照)からは開元通寶という漢字と都市の紋章(右の上)

が鋳込まれた銅貨（後 7～8 世紀）が出土している。これはユーラシアで漢字が使われた最西端となるのではなかろうか。ブハラから東に向かい、天山山脈の北、バルハシ湖の南の地域(セミレチエ)からはソグド文字ソグド語と漢字「元」が鋳込まれた銅貨（後 8 世紀前半）が発行された。

以上はソグディアナとその周辺の資料であるが、中国側の資料として陝西省西安市から出土したソグド人墓の墓誌拓本（580 年）¹も紹介する。碑文の左側が漢字漢文で、縦に右から左に刻されている。碑文の右側がソグド文字ソグド語となっている。ソグド文は通常横書きであるが、この碑文では縦に左から右に刻されている。なぜ縦書きが現れたか、定説はないようだが、これを漢字漢文の影響とする見方もある²。

- ①打刻貨幣から中国式の方孔円形の鋳造貨幣へ。
- ②ソグド文字ソグド語と漢字の 2 言語併用貨幣を発行。
- ③縦書きソグド文の出現。漢文の影響か。

5. モンゴル帝国における諸民族の交流

インド西北で出現した 2 言語併用貨幣の形式はその後周辺地域に拡大した。また 2 言語が合壁となった石碑も珍しいものではないが、モンゴル人支配下の元朝になると、5 種類前後の文字と言語が一堂に会する資料が現れる。居庸関の過街塔（1343 年）は、北京の北西約 50 キロに位置する。華北から蒙古高原に至る道筋にある。旅行者の安全祈願のために立てられたもので、その内壁の 6 種の文字³による碑文は有名である。6 種の文字と言語を同定し、解読するのが 19 世紀東洋学者の重要課題の一つであった。これに類似したものに、敦煌莫高窟の六字真言碑（1348 年）がある。また、生活に関わる実用品としては、竿秤用の銅製の錘がある。今回紹介する銅錘には元貞元年（1295）の銘とともに、漢字漢語、パспа文字漢語、モンゴル文字モンゴル語、アラビア文字アラビア語が刻まれている。このような諸言語と文字が合壁となった資料は、さまざまな民族の交流があったモンゴル時代の雰囲気を体現したものであろう。

5 種前後の文字と言語が合壁になっていると言っても、これは量の問題である。モンゴル時代には、新たな質の文字資料も出現した。漢字仮名交り文のように異なる文字で 1 単語を表記した銘文をもつ貨幣や印鑑がある。

¹ 西安市文物保護考古所 2005 「西安北周涼州薩保史君墓発掘簡報」（『文物』2005 年第 3 期, 4-32 頁）参照。

² 庄垣内正弘 2001（「ウイグル文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著, 三省堂, 2001 年, 118-121 頁）参照。

³ ランチャ（ランツァ）文字サンスクリット語、チベット文字チベット語、パспа文字モンゴル語、ウイグル文字ウイグル語、西夏文字西夏語、漢字漢語の碑文。



四体字銭

パспа文字の印鑑

左の四体字銭は、漢語の至元通寶（至元年間は1264-1294及び1335-1340）という語を4種の文字で音写する。上：パспа文字（至）、下：ウイグル文字（元）、右：アラビア文字（通）、左：西夏文字（寶）。右の印鑑はパспа文字で縦に3行書かれている。中央部分がおもしろい。契約を意味する漢語の「合同」の合をパспа文字（yoとローマ字化する）で表記し、同は篆書風の漢字を用い、「yo-同」とする。漢字パспа文字交り文というところであろうか。このような現象は貨幣や印鑑の銘文に限られるが、私はパспа文字の影響とみている。パспа文字は、フビライがチベット僧のパспаに作らせ至元六年(1269)に公布した表音文字。パспа文字による文を主文とし、各国の文字による文を副文として添えよという勅がある。モンゴル語だけでなく、漢語、テュルク語、サンスクリット語、チベット語など帝国支配下の様々な言語の表記を意図して作られた文字である。ラテン文字のように様々な言語に借用された結果、複数の異なる言語を表記するようになった例は珍しくないが、パспа文字のように文字を作成する当初から複数の言語を表記することを目的とした例は稀である。或いは文字の歴史上初めての試みであったかもしれない。1語を複数種の文字で表記する銘文の出現は、パспа文字の特異な用法を背景としたものであろう。

6. おわりに

民族や国家に興亡の歴史があるように、人と共にある文字にも興亡と言ってよい過程がある。この過程にあって変わらないものと変わるものがある。変わらないものは慣用の力による。たとえば、漢字で書かれた中国語は長い間、意味の切れ目を示す句読点がほどこされなかった。第三者の眼には不便このうえないものに映るが慣れ親しんだ慣用の力によって長らえた。いっぽう、変わるものには小さいものと大きいものがある。小さな変化を引き起こす要因は様々であるが、楽に書きたい、明瞭に書きたい、おもしろく書きたいなど、しばしば内発の欲求による。大きいものは異なる民族が持つ慣用と慣用の接触による。じつに、文字の外形と用法は、慣用によって保持され、欲求によって改められ、異なるものとの接触により創り変えられる。今回は、接触による変容について「シルクロードの文字と文化」と題して確認した。